



高校・大学

Lesson 4 識者に聞く

大学入試における主体性評価について考えてきた連載の最終回。高大接続や大学入試の改革を進めてきた中央教育審議会の前会長で日本学術振興会の安西祐一郎顧問(72)と、教育心理学者で東北大での入試改革に携わる倉元直樹教授(57)に話を聞いた。

子どもの数が減っている。主体性を持って人生にチャレンジしていかないと経済も社会も成り立たない。社会で誰もが活躍できるようにするには、インノベティブな考え方が必要。そういう考え方を育てる人がたくさん出てきてくれないと困る。インドや中国の学生は意欲があり、ハングリー精神もあ

り。一緒に仕事をすると本当にやっつけていけるのかなど。ぼく自身は人間の思考や学習の研究をしている。今は人工知能(AI)の実用化や、グローバル化で予測が難しい時代になってき

て。主体性が重要ということのみな賛成するが、どう定義し、評価するかとなると意見が分かれ難い。入試の現場では評価すべきでないとの声が強

主体性評価とは

高大接続の現場から

とはいえ、各大学が評価指標を作るのであれば、どんな人材を世に送り出したかから逆算し、受験生を守るために基準を明確にし、入試で必要な情報が何か考

えるべきだ。例えば東北大は研究者の養成大学なので、大切にしたい主体性は、地道な努力を毎日積み重ねていく姿勢。一般入試でも調査書に対応しながらどう項目化し、受験生に自己申告してもらうか検討中だ。

世界に通じる力を

ている。そのような時代を生き抜くためにどんな力が生かされるか、教育再生実行会議や中央教育審議会が話し合

日本学術振興会 安西祐一郎顧問



あんざい・ゆういちろう 1946年生まれ。専門は認知科学・情報科学。元慶応義塾長。日本アクティブラーニング協会会長。

と初対面でもきちんと話ができるかが大事。自分とはうまの合わない人とチームでやる機会を持つ。これが主体性、多様性、協働性、経験できるかどうかが大きい。主体性があるというのはバックグラウンドの違う人

目標を持っていること。e 大学の側がやらなければならぬのは、「育てたい」と思った受験生に入学してもらうこと。入学者選抜に携わる部門を強化しないと対応していきよしたら、大学は一日のバーバーストではなく、ある程度時間をかけて受験生を選ばなくてはいけない時代が来る。(大沢悠)

東北大 倉元直樹教授



くらもと・なおき 1961年生まれ。博士(教育学)。大学入試センターなどを経て99年から東北大の入試に携わる。日本テスト学会理事。

調査書の活用は長年議論されているが、受験生としては自分のあすかり知らぬ書類で不合格になると納得できない。誰が手を入れられるリスクもある。課外活動なども影響される。e ポートフォリオは高校生や表現力にも影響される。主体性評価が、健全な高

内発性奪う恐れも

1、費用をかけ受験生の個人情報を守るが、膨大な情報はそのまま入試に使えるわけではなく、外部に漏れるリスクもある。課外活動などに経済格差も響く。主体性評価が、健全な高 校生活や全人的な教育活動を脅かしてはならない。主

(倉原千曲)